

寸情風土記

泉鏡花

青空文庫

金澤かなざはの正月しやうぐわつは、お買初めかひぞ、お買初めかひぞの景氣けいきの好い聲こゑにて
 はじまる。初買はつがひなり。二日の夜中ふつかなより出立いでたつ。元日ぐわんじつは何なんの
 商賣しやうばいも皆休みなやすむ。初買はつがひの時とき、競つて紅鯛べにだひとて縁起えんぎものを買か
 ふ。笹ささの葉はに、大判おほばん、小判こばん、打出うちでの小槌こづち、寶珠はうしゆなど、就なかんづ
 中く、緋ひに染色そめいろの大鯛おほだひ小鯛こだひを結付ゆひつくるによつて名なあり。お西とり
 様さまの熊手くまで、初卯はつうの繭玉まゆだまの意氣いきなり。北國ほくこくゆゑ正月しやうぐわつはい
 つも雪ゆきなり。雪ゆきの中なかを此この紅鯛べにだひ綺麗きれいなり。此このお買初めかひぞの、雪ゆき
 の眞夜中まよなか、うつくしき灯ひに、新版しんばんの繪草紙ゑぐさうしを母はに買かつてもらひ
 し嬉うれしき、忘れ難わすし。
 おなじく二日の夜ふつかな、町まちの名なを言いひて、初湯はつゆを呼よんで歩あるく風俗ふうぞく

以前^{いぜん}ありたり、今^{いま}もあるべし。たとへば、本^{ほん}町^{ちやう}の風呂屋^{ふうろや}ぢや、湯^ゆが沸^わいた、湯^ゆがわいた、と此^このぐあひなり。これが半^{はん}纏^{てん}向^{むか}うはち卷^{まき}の威勢^{ゐせい}の好^いいのでなく、古^{ふる}合^が羽^{つば}に足駄^{あしだば}穿^はき懷^{ふところ}手^でして、のそり／＼と歩^{ある}行^{ある}きながら呼^よぶゆゑをかし。金^{かな}澤^ざばかりかと思^{おも}ひしに、久須美^{くすみ}佐渡守^{さどのかみ}の著^あす、(浪華^{なには}の風^{かぜ})と云^いふものを讀^よめば、昔^{むかし}、大^{おほ}阪^{さか}に此^このことあり——二^ふ日^{つか}は曉^{あけ}七^{なな}つ時^{とき}前^{まえ}より市^し中^{ちゆう}螺^らなど吹^ふいて、わいたわいたと大^{おほ}聲^{こゑ}に呼^よびあるきて湯^ゆのわきたるをふれ知^しらす、江^え戸^どには無^なきことなり——とあり。

氏^{うぢ}神^{がみ}の祭^{さい}禮^{らい}は、四^し五^ご月^{がつ}頃^{ころ}と、九^く十^{じふ}月^{がつ}頃^{ころ}と、春^{しゆん}秋^{きゆう}二^に度^どづゝあり、小^こ兒^{ども}は喜^{おほ}びなり。秋^{あき}の祭^{まつり}の方^は賑^{はな}し。祇^ぎ園^{をん}囃^ば子^や、獅^し子^しなど出^いづるは皆^{みな}秋^{あき}の祭^{まつり}なり。子^こ供^{ども}た^ちは、手^てに手^てに太^{たい}鼓^こ

の撥ばちを用意よういして、社の境内けいだいに備へつけの大太鼓おほだいこをたゞきに行ゆき、また車くるまのつきたる黒塗くろぬりの臺だいにのせて此これを曳ひきながら打う囉なやして市中しちうを練ねりまはる。ドバンガドン。こりや、と合あひの手てに囉はやす。わつしよいくと云いふ處ところなり。

まつりとき祭まつりの時ときのお小遣こづかひを飴買あめかひ錢ぜにと云いふ。飴あめが立たてものにて、鍋なべにあたゝて暖あためたるを、麻あさ殻がらの軸ぢくにくるりと卷まいて賣うる。飴買あめかつて麻あさやろか、と言いふべろんの言葉ことばあり。饅頭まんぢう買かつて皮かはやろかなり。御ご祝儀しうぎ、心こころづけなど、輕少けいせうの儀ぎを、此これは、ほんの飴買あめかひ錢ぜに。

金澤かなざはにて錢百ぜにと云いふは五厘りんなり、二百が一錢せん、十錢せんが二貫くわんなり。たゞし、一圓ゑんを二圓ゑんとは云いはず。

蒲鉾かまぼこの事ことをはべん、はべんをふかしと言いふ。即すなはち紅白こうはくのは

べんなり。皆板みないたについたまゝを半月はんげつに揃そろへて鉢はち着ぎに装もる。

逢あひたさに用ようなき門かどを二度三度、と言いふ心意氣こゝろいきにて、ソツと白し

ろかべ

壁、黒堀くろべい

について通とほるものを、

「あいつ板附いたつきはべん」と言い

ふ洒落しやれあり、

古い洒落しやれなるべし。

お汁つゆの實みの少すくないのを、

百間堀ひやくけんぼりに霰あられと言いふ。

田螺たにしと思おもつた

ら目球めだまだと、

同じ格おなかくなり。

百間堀ひやくけんぼりは城しろの堀ぼりにて、

意氣いきも不意ぶい

氣きも、身投みなげの多おほき、

晝ひるも淋さびしき所ところなりしが、

埋立うめたてたれば今いまはな

し。電車でんしやが通とほる。

満員まんゐんだらう。

心しんぢう中ちうしたのがうるさかりな

む。

春雨はるさめのしめやかに、

謎なぞを一つ。……

何枚衣なんまいきものを重ねかさても、

お役やくに立たつは膚はだばかり、

何なに?……筍たけのこ。

然るべき民謡集の中に、金澤の童謡を記して（鳶のおし
 ろに鷹匠が居る、あつち向いて見さい、こつち向いて見さい）
 としたるは可きが、おしろに註して（お城）としたには吃驚な
 り。おしろは後のなまりと知るべし。此の類あまたあり。茸狩り
 の唄に、（松み、松み、親に孝行なもんに當れ。）此の松
 み、に又註して、松茸とあり。飛んだ間違なり。金澤にて
 言ふ松みは初茸なり。此の茸は、松美しく草浅き所にあれば子
 供にも獲らるべし。（つくしん坊めつかりこ）ぐらゐな子供に、
 何處だつて松茸は取れはしない。一體童謡を収録するの
 に、なまりを正したり、當推量の註釋は大の禁物なり。
 鬼ごつこの時、鬼ぎめの唄に、……（あてこに、こてこに、い

けの縁に茶碗を置いて、危いことぢやつた。）同じ民謡集に、
 此のいけに（池）の字を當ててあり。あの土地にて言ふいけは井
 戸なり。井戸のふちに茶碗ゆゑ、けんのんなるべし。（かしや、
 かなざもの、しんたてまつる云々）これは北海道の僻地の俚
 謡なり。其處には、金澤の人多人數、移住したるゆゑ、故
 郷にて、（加州金澤の新堅町の云々）と云ふのが、次第にな
 まりて（かしや、かなざものしんたてまつる。）知るべし、民
 謡に註の愈々不可なること。

新堅町、犀川の岸にあり。こゝに珍しき町の名に、大衆免、
 木の新保、柿の木畠、油車、目細小路、四這坂。例の公
 園に上る坂を尻垂坂は何した事？ 母衣町は、十二階邊と

言ふ意味に通ひしが今は然らざる也。——六斗林は筍が名物。
 目黒の秋刀魚の儀にあらず、實際の筍なり。百々女木町も字
 に似ず音強し。

買物にゆきて買ふ方が、（こんね）で、店の返事が（やあ／
 ）。歸る時、買った方で、有がたう存じます、は君子なり。――
 ーほめるのかい――いゝえ。

地震めつたになし。しかし、其のぐらくと来る時は、家々
 に老若男女、聲を立てて、世なほし、世なほし、世なほし
 と唱ふ。何とも陰氣にて薄氣味悪し。雷の時、雷山へ行け、地震
 は海へ行けと唱ふ、たゞし地震の時には唱へず。

火事をみて、火事のことを、あゝ火事が行く、火事が行く、と

叫^{さけ}ぶなり。彌^や次馬^{じうま}が駈^かけながら、互^{たがひ}に聲^{こゑ}を合^あはせて、左^{ひだり}、左^{ひだり}、左^{ひだり}、左^{ひだり}。

夏^{なつ}のはじめに、よく蝦蟇^{がま}賣^うりの聲^{こゑ}を聞^きく。蝦蟇^{がま}や、蝦蟇^{がま}い、と

呼^よぶ。又^{また}此^この蝦蟇^{がま}賣^うりに限^{かぎ}りて、十二三、四五位^{ぐらゐ}なのが、きまつ

て二人^{ふたり}連^づれにて歩^{ある}くなり。よつて怪^けしからぬ二人^{ふたり}連^づれを、畜^{ちくしや}

生^う、蝦蟇^{がま}賣^うめ、と言^いふ。たゞし蝦蟇^{がま}は赤^{あか}蛙^{がへる}なり。蝦蟇^{がま}や、

蝦蟇^{がま}い。——そのあとから山^{やま}男^{をとこ}のやうな小父^{をぢ}さんが、柳^{やなぎ}の蟲^{むし}

は要^いらんかあ、柳^{やなぎ}の蟲^{むし}は要^いらんかあ。

鯖^{さば}を、鯖^{さば}や三番^{さんば}叟^{そう}、とすてきに威勢^{ゐせい}よく賣^うる、おやゝ、初^は

鰹^{かつ}の勢^{いきほひ}だよ。鰯^{いわし}は五月^{ごぐわつ}を季^{しゆん}とす。さし網^{あみ}鰯^{いわし}とて、砂^{すな}の

まゝ、筭^{ざる}、盤臺^{はんだい}にころがる。嘘^{うそ}にあらず、鯖^{さば}、鰯^{いわし}ほどの大^{おほき}きな

り。あたやす値安し。これを焼やいて二十食くつた、酢すにして十食とをくつたと云いふ。
をとこ男だて澤山たくさんなり。次手ついでに、目刺めざしなし。大小だいせういづれも串くしを用もちゐ
 ず、乾ほしたるは干鰯ひいわしといふ。土地とちにて、いなだは生魚なまうをにあら
 ず、鰯ぶりを開ひらきたる乾ひものなり。夏なつちう中の好下物いゝさかな、盆ぼんの贈答ぞうたふに用
 ふる事こと、東京とうきやうに於おけるお歳暮せいぼの鮭さけの如ごとし。然さればその頃ころは、
 町々まちく、辻々つじくを、彼方あつちからも、いなだ一枚まい、此方こつちからも、いな
 だ一枚まい。

なだ灘の銘酒めいしゆ、白鶴はくつるを、白鶴はくかくと讀よみ、いろ盛ざかりをいろ盛もりと讀よむ。
むすめざかり娘盛むすめもりも娘盛じやうだと、お嬢しやうさんのお酌しやくにきこえる。

たうなす南瓜なうなすを、かぼちやとも、勿論もちろん南瓜たうなすとも言いはず皆みなばぶら。
まくは眞桑まのうりを、美濃瓜みのうり。奈良漬ならづけにする浅瓜あさうりを、堅瓜かたうり、此この堅瓜かたあぢはひ味

よし。

蓑みのの外ほかに、ばんどりとて似たものあり、蓑みのよりは此この方ほうを多く
もち用ふ。磯いそ一いつ峯ぼうが、（こし地紀行）に安宅あたかの浦うらを一里左に見つゝ、
と言いふ處ところにて、

（大國おほくにのしるしにや、道廣みちひろくして車を並べつべし、周道しうだう如ごと
砥としとかや言いひけん、毛詩まうしの言葉ことばまで思おもひ出いでらる。並木なみきの松嚴まきび
しく聯つらなりて、枝えだをつらね蔭かげを重かさねたり。往來わうらいの民たみ、長ながき草くさにて
蓑みのをねんごろに造つくりて目馴めなれぬ姿すがたなり。）

と言いひしはこれなるべし。あゝ又雨またあめぞやと云いふ事ことを、又またばんど
りぞやと云いふ習ならひあり。

祭禮さいれいの雨あめを、ばんどり祭まつりと稱となふ。だんどりが違ちがつて子供こどもは弱よわ

る。

關取せきとり、ばんどり、おねばとり、と拍子ひやうしにかゝつた言ことばあり。

負けまずまふは、大雨おほあめにて、重湯おもゆのやうに腰こしが立たぬと云いふ後しりう
言ことなるべし。

いつぞや、同國どうこくの人の許もとにて、何かなにの話はなしの時とき、鉢前はちまへのバケ

ツにあり合あはせたる雑巾ざふきんをさして、其その人ひと、金澤かなざはで何なんと言いつ

たか覺おぼえてゐるかと問とふ。忘わすれたり。ぢぶきなり、其その人ひと、長なが

火鉢ばちを、此これはと又また問とふ。忘わすれたり。大和風呂やまとぶろなり。さて酔よつば

らひの事ことを何なんと言いつたつけ。二人ふたりとも忘わすれて、沙汰さたなし。

内證ないしよの情婦いろのことを、おきせんと言いふ。たしか近松ちかまつの心しんぢ

中うものの何なにかに、おきせんとて此この言葉ことばありたり。どの淨瑠璃じやうるり

かしらべたけれど、おきせんも無いのに面倒なり。

眞夏、日盛りの炎天を、門天心太と賣る聲きはめてよし。

靜にして、あはれに、可懷し。荷も涼しく、松の青葉を天秤に

かけて荷ふ。いゝ聲にて、長く引いて靜に呼び來る。もんでん、

こゝろウぶとウ――

續いて、萩、萩の上葉をや渡るらんと思ふは、盂蘭盆の切籠

賣の聲なり。青竹の長棹にづらりと燈籠、切籠を結びつ

けたるを肩にかけ、二ツ三ツは手に提げながら、細くとほるふし

にて、切籠ウ行燈切籠――と賣る、町の遠くよりきこゆるぞか

し。

氷々、雪の氷と、こも俵に包みて賣り歩くは雪をかこへる

ものなり。^{のこぎり}鋸にてザク／＼と切つて寄越す。^{ひざかり}日盛に、^{まち}町を呼びあ
るくは、^{をんな}女や兒たちの^{こづかひとり}小遣取なり。^{よみせ}夜店のさかり場にては、^ば屈
つきやう^{わかもの}な若い者が、^{まつりさわ}お祭騒ぎにて賣る。^{とち}土地の俳優の白
^{かほ}粉の顔にて^で出た事あり。^{やね}屋根より高い^{たか}大行燈を立て、^{おほあんど}白雪
^{やま}の山を^つ積み、^{だい}臺の上に^た立つて、やあ、^{はくさん}がばり／＼と遣る。^やはじめ、^{あんど}がばり
く。^{あんどう}行燈にも、^{はくさん}白山氷がばり／＼と遣る。^やはじめ、^{ゆき}がばり
／＼は雪の^{やすうり}安賣に^{かぎ}限りしなるが、^{しだい}次第に^{なにごと}何事にも^{もち}用ゐられて、
^{なげうり}投賣、^{すてう}棄賣り、^{みきりう}見切賣りの場合となると、^{せとものや}瀬戸物屋、^{ごふくみせ}呉服店、
^{ふだ}札を^{たて}たてて、^{ぐあん}がばり／＼。^{ゆき}愚案ずるに、^きがばりは雪を^{おと}切る音なる
べし。

^{みづたまさう}水玉草を^う賣る、^{すゞ}涼し。

夜店に、よみせ だいだう 大道にて、どぢやうき 鰯を割き、くし 串にさし、つけやき 付焼にして賣る

を關東焼とて行はる。くわんとやき おこな 蒲焼の意味なるべし。

しまんろくせん にち

はちぐわつ

四萬六千日は八月なり。さしもの暑さも、あつ 此の夜のころ、

觀音の山より涼しき風そよくと訪づる、くわんのん やま すゞ かぜ おと なつか 可懷し。

唐黍を焼く香立つ也。

たうもろこし や にほひた なり

秋は茸こそ面白けれ。あききのこ おもしろ まつたけ 松茸、はつたけ 初茸、きたけ 木茸、いはたけ 岩茸、しめぢ 占地

いろく、せんぼんしめぢ 千本占地、をぐらしめぢ 小倉占地、いつぼんしめぢ 一本占地、えのきだけ 榎茸、はりだ 針

茸、まひだけ 舞茸、どく 毒ありとても紅茸は紅に、べに 黄茸は黄に、きだけ 白に紫

に、ばうずだけ 坊主茸、まんぢうだけ 饅頭茸、からすだけ 烏茸、とんびだけ 鳶茸、はひだけ 灰茸など、ほ 本

草にも食鑑にも御免蒙りたる恐ろしき茸にも、しよくかん ごめかうむ おそ 一つ一つ名

をつけて、かご 籠に装り、こ 籠に狩る。茸爺、きのこぢい 茸媼とも名づく

べき茸狩りの古狸。きのこが ふるだぬき 町内に一人位づゝ必ずあり。ちやうない ひとひとり かなら 山入やまいり

の先達なり。せんだつ

芝茸と稱へて、笠薄樺に、裏白なる、小さな茸の、山近しばたけ とな かさうすかば うらじろ

く谷浅きあたりにたにあさも群生して、子供にも就中これが容易きぐんせい こども なかんづく たやす

獲ものなるべし。え毒なし。どく味もまた佳し。あぢ よ宇都宮にてこの茸掃きのこは

くほどあり。たれしよく誰も食する者なかりしが、金澤かなざはの人の行きて、此こ

れは結構と豆腐の汁にしてつるゝと賞玩しやうぐわんしてより、同地どうち

にても盛に取り用ふるやうになりて、それまで名の無かりしを金か

澤茸と稱する由。なさはたけしやう よし實説なり。じつせつ

茹栗、焼栗、可懷し。ゆでぐり やきぐり なつか酸漿は然ることなれど、丹波栗たんばぐり

と聞けば、里遠く、山遙に、仙境の土産の如く幼心に思き さとほ やほるか せんきやう みやげ ごと をさなごころ おも

ひしが。

松蟲まつむしや——すゞ蟲むし、と莫塵ごぢきて、菅笠すががさかむりたる男をとこ、籠かごを

背せに、大な鳥おほきとりの羽はねを手にして山やまより出いづ。

こつさいりんしんかとして柴しばをかつぎて、※さん被あねりにしたる村むら

里らざとの女房にようばう、娘むすめの、朝疾あさとく町まちに出いづる状さまは、京きやうの花賣はなうりの風ふう

情ぜいなるべし。六むつツ七ななツ茸きのこを薄うすに抜ぬきとめて、手てすさみに持もてるも

風情ふぜいあり。

渡わたりどり、鳥とり、小雀こがら、山雀やまがら、四十雀しじふから、五十雀ごじふから、目白めじろ、菊きくいたゞ

き、あとりを多く耳みみにす。棕鳥むくど少すくなし。鶉つぐも最も多おほし。

じぶと云いふ料理れうりあり。だししたちに、慈姑くわゐ、生麩なまぶ、松露しようろなど

取合とりあはせ、魚鳥ぎよてうをうどんの粉こにまぶして煮に込み、山葵わさびを吸すひくち口

にしたるもの。近頃頻々として金澤に旅行する人々、
 皆その調味を賞す。

蕪の鮓とて、鰯の甘鹽を、蕪に挟み、麴に漬けて壓しならし
 たる、いろどりに、小鰈を紅く散らしたるもの。此ればかりは、
 紅葉先生一方ならず賞めたまひき。たゞし、四時常にある
 にあらず、年の暮に霰に漬けて、早春の御馳走なり。

さて、つまみ菜、ちがへ菜、そろへ菜、たばね菜と、大根のう
 ろ抜きぬの葉は、露つゆも次第しだいに繁しげきにつけて、朝寒あさざむ、夕寒ゆふざむ、やゝ寒さむ、
 肌寒はださむ、夜寒よさむとなる。其そのたばね菜なの頃ころともなれば、大根だいこんの根ね、
 葉はともに霜しも白しろし、其その味あじ辛からし、然しかも潔いさぎよし。

北國ほくこくは天てん高くして馬うま瘦やせたらずや。

大根曳きは、家々の行事なり。此れよりさき、軒につりて
 干したる大根を臺所に曳きて澤庵に壓すを言ふ。今日は誰
 の家の大根曳きだよ、などと言ふなり。軒に干したる日は、時雨
 颯と暗くかゝりしが、曳く頃は霰、霰とこそなれ。冷たさ然こそ、
 とうきやう 東京にて恰もお葉洗と言ふ頃なり。夜は風呂ふき、早や炬
 燵こひしきまどゐに、夏泳いだ河童の、暗く化けて、豆腐買ふ沙
 汰がはじまる。

小著の中に、

其の雲が時雨れく、て、終日終夜降り續くこと二
 日三日、山陰に小さな青い月の影を見る曉方、ぱら
 くと初霰。さて世が變つた様に晴れ上つて、晝に

となると、寒さが身に沁みて、市中五萬軒、後馳せの
 分も、やゝ冬構へなし果つる。やがて、ところは闇
 となり、雲は墨の上に漆を重ね、月も星も包み果てて、
 とき／＼かぜ風が荒れ立つても、其の一片の動くとも見え
 ず。恁て天に雪催が調ふと、矢玉の音たゆる時なく、
 丑、寅、辰、巳、刻々に修羅磔を打かけて、
 々、又玉霰。

としたるもの、拙けれども殆ど實境也。
 化かすのは狐、化けるのは狸、貉。狐狸より貉の化ける話多し。
 三三冬を蟄すれば、天狗恐ろし。北海の荒磯、金石、大
 野の濱、轟々と鳴りとゞろく音、夜毎襖に響く。雪深くふと

せきばく 寂寞たる時、不思議なる笛太鼓、鼓の音あり、山風にのつ

てトトンヒューときこゆるかとすれば、忽ち颯と遠く成る。天狗

のお囃子と云ふ。能樂の常に盛なる國なればなるべし。本所

の狸囃子と、遠き縁者と聞く。

豆の餅、草餅、砂糖餅、昆布を切込みたるなど色々色の餅

を搗き、一番あとの臼をトンと搗く時、千貫萬貫、萬

々貫、と哄と喝采して、恁て市は榮ゆるなりけり。

櫃の實、澁く侘し。子供のふだんには、大抵柑子なり。蜜柑

たつとし。輪切りにして鉢ものの料理につけ合はせる。浅草海苔

を一枚づゝ賣る。

上丸、上々丸など稱へて胡桃いつもあり。一寸煎つて、

飴あめにて煮る、これは甘いうまい。

蓮根はす、蓮根はすとは言はず、蓮根れんこんとばかり稱とふ、味あじよし、柔やはらかにし

て東京とうきやうの所謂餅蓮根いはゆるもちばすなり。郊外かうぐわいは南北凡そ皆蓮池なんぼくおよみなはすいけ

にて、花開く時、紅々白白はなはらときこうくはくく。

木槿むくげ、木槿はちすにても相分らず、木槿もくでなり。山やまの芋いもと自然生じねんじやうを、

分けて別々べつくに稱とふ。

風たこ、皆みないかとのみ言いふ。扇あふぎの地紙形ぢがみがたに、兩方りやうほうに袂たもとをふく

らましたる形かたち、大々小々だいくせうくいろくあり。いづれも金きん、銀ぎん、青あを、

紺こんにて、圓まるく星ほしを飾かざりたり。關東くわんとうの風たこはなきにあらず、名なづ

けて升ます風いと言いへり。

地形ちけいの四角しかくなる所ところ、即ち櫺形ますがたなり。

をんなこ

女の子、どうかすると十六七の妙齡めうれいなるも、自分の事じぶん ことをタア

と言ふい。男の兒をとこは、ワシは蓋けだしつゝ通りか。たゞし友達ともだちが呼よび

出すのに、ワシは居ゐるか、と言ふ。此この方はどつちもワシなり。

お螻殿けらのを、佛ほとけさん蟲むし、馬追うまおひ蟲むしを、鳴聲なきこゑでスイチヨと呼よぶ。

鹽買しほがひと蜻蛉とんぼ、味噌買みそがひと蜻蛉とんぼ、考かうし證しょうに及およばず、色合いろあひを以もつて子こども

供衆しうは御存ごぞんじならん。おはぐる蜻蛉とんぼを、※と言いふ。

螢ほたる、淺野あさの川がはの上じやうりう流りうを、小立野こだつのに上のぼる、鶴間谷つるまだにと言いふ所、

今いまは知らず、凄すごいほど多く、暗夜あんやには螢ほたるの中なかに人の姿ひとすがたを見るみるばか

りなりき。

清水しみづを清水しやうづ。——桂清水かつしやうづで手拭てぬぐひひろた、と唄うたふ。山中やまなかの湯ゆ

女のな後きぬ朝あさなまめかし。其その清水しやうづまで客きやくを送おくりたるものよし。

にひやくとをか おとしみづ
 二百十日の落水に、鯉、鮒、鯰を掬はんとて、何處の町
 やうない
 内も、若い衆は、田圃々々《く》へ總出で騒ぐ。子供たち、
 にひやくとをか
 二百十日と言へば、鮒、カンタをしやくふものと覺えたほどな
 り。

なぞ ひと ろくかくだう こぞうひとり まる
 謎また一つ。六角堂に小僧一人、お参りがあつて扉が開く、
 なに ほうづき
 何?……酸漿。

みそ こがひ しち
 味噌の小買をするは、質をおくほど恥辱だと言ふ風俗なり
 はず
 し筈なり。豆腐を切つて半挺、小半挺とて賣る。菰 蕪
 とうふや
 は豆腐屋につきものと知り給ふべし。おなじ荷の中に 菰 蕪キ
 ツトあり。

そば しるこなど ちよつとはひ
 蕎麥、お汁粉等、一寸入ると、一ぜんでは濟まず。二ぜんは

あたりまへ
當 前。だまつて食^たべて居^ゐれば、あとからくつきつけ装^もり出^だ

す^し習^ふ慣^わあり。古風^{こふう}淳^{じゆん}朴^{ぼく}なり。たゞし二百が一^{せん}錢^{せん}と言^いふ勘^か

定^{んぢやう}にはあらず、心^{こころ}すべし。

ふと思^{おも}出^{ひだ}したれば、鄰^{りん}國^{ごく}富山^{とやま}にて、團扇^{うちは}を賣^うる珍^{めづ}しき呼^{よび}

聲^{こゑ}を、こゝに記^{しる}す。

團扇^{うちは}やア、大團扇^{おほうちは}。

うちは、かつきツさん。

いつきツさん。團扇^{うちは}やあ。

もの知りだね。

ところで藝^{げい}者^{しや}は、娼妓^{をやま}は？……をやま、尾山^{をやま}と申^{まを}すは、金^{かな}

澤^はの古稱^{こしょう}にして、在^{ざい}方^{かた}鄰國^{りんごく}の人^{ひと}達^{たち}は今^{いま}も城下^{じやうか}に出^いづ

る事を、尾山にゆくと申すことなり。何、その尾山ぢやあない？
……そんな事は、知らない、知らない。

大正九年七月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十八」岩波書店

1942（昭和17）11月30日第1刷発行

1988（昭和63）12月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、作品末に移しました。

入力：門田裕志

校正：米田進

2002年5月8日作成

2011年3月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

寸情風土記

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>